



建学の精神

「キリスト教の精神に基づき、他者への愛と奉仕の精神を備える自立した女性を育成する」

梅花学園の歴史は、1878年(明治11)創立の梅花女学校に始まります。創立者である澤山保羅は、キリストにあって生きる私たちは互いに愛し合わねばならない、私たちが心から愛するならば私たちは神の愛の手にあると説き、「人にしてもらいたいと思うことは何でもあなたがたも人にしなさい」とマタイによる福音書7章12節の聖句を強調しました。澤山はまた、男女は互いに助け合って社会を作るように神によって創造されたのであり、対等に神の創造の業につながるべきであると主張しました。封建思想がまだ根深く残る時代において、女性が男性と同じく人間として固有の価値を持つことを教え、一人ひとりがしっかりと自立しつつ他者への愛と奉仕の精神に生きることを願ったのです。

この建学の精神は、常に立ち戻るべき原点として梅花学園に受け継がれています。



梅花学園 校章・マーク
BAIKAのBと、梅花学園の教育の原点である
(キリスト教の愛の精神)を表わすハートを
モチーフにしている。

学校法人 梅花学園

〒567-8578 大阪府茨木市宿久庄2-19-5

TEL : 072-643-6221 FAX : 07-643-8927

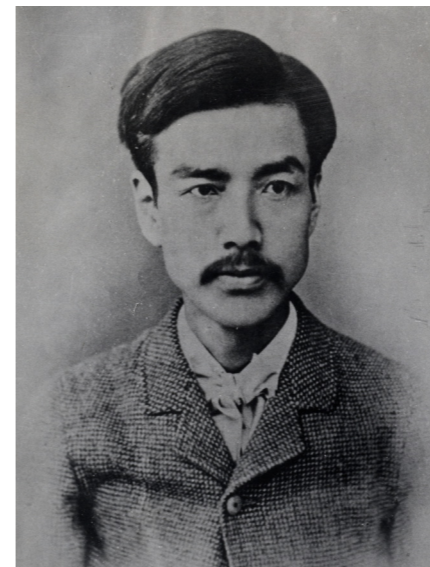


創立

1878年(明治11)1月、浪花公会(現・浪花教会)牧師であった澤山保羅が中心となり、梅本町公会(現・大阪教会)と浪花公会の信者有志が協力して、土佐堀裏町(現在の大阪市西区江戸堀1丁目)に「梅花女学校」を開校しました。彼らは次代の子女の教育を担うべき女子に対する愛の教育の必要性を痛感し、愛を育てる婦人になるための「愛なる女学校」の設立をめざしたのです。

澤山から受洗し草創期の梅花女学校の核となった成瀬仁蔵(のちに日本女子大学を創立)は、女学校開校式の式辞で次のように述べています。「婦女子を培養するは、愛なる女学校を設立し、愛種を以て、婦女子なる田に蒔に如くはなし。余輩宜しく茲に志を注がざるべけんや。夫れ人たるものは婦人より生れ、其の教育を受け其の性を習はざるものなし。故に愛に由り養育すれば愛となり、悪により養育すれば悪となる。これ当然の理なり。然れば婦人は文明開化の基礎とも謂ふべけんか。母愛あれば子愛あり、子愛あれば天下の人は母より生れざるもの無ければ天下の人愛あり。天下の人愛あって、国家文明の域に趣かざるの理なき、論を待ずして明かなり」。梅花女学校は、「愛なる女学校」として「愛の種」を育む場となるべくして誕生し、愛に出合った女性たちがさらに家庭や社会にそれを伝え発信することを目指したのです。「梅花」の校名は、梅本町公会と浪花公会の名に因んで命名されたものです。

梅花女学校は、澤山の強いリーダーシップにより自給独立の精神に則って運営され、日本人教会と生徒の費用で運営される日本最初のキリスト教主義に基づく自給学校となりました。



創立者 新島襄(1843~1890年)
「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ」という新島襄の願いが、正門に建っている「良心碑」に刻まれています。



創立の背景と歴史

澤山保羅は、1852年(嘉永5)長州・吉敷村(現・山口市吉敷)で生まれ、馬之進と名づけられました。父は吉敷毛利藩に仕える下級武士でした。吉敷憲章館で漢学を学び、のちにキリスト教に回心する要因の一つともなった陽明学に出会い、これを深めました。

洋学修行を志した澤山は、1870年(明治3)ごろ同郷の先輩で兵庫県大参事(現在の副知事職に相当)となっていた内海忠勝(のちの内務大臣)を頼って神戸に出ます。内海は、澤山をアメリカン・ボードの宣教師D・C・グリーンに紹介しました。澤山はグリーン宅で英語を学び、やがて家庭礼拝にも出席するようになります。澤山の信仰への目覚めでした。

1872年(明治5)、澤山はグリーンの手配によってアメリカ・イリノイ州エバンストンに留学します。結核を発病し、現地で入院・手術を余儀なくされる厳しい留学でしたが、ノースウェスタン大学予科に学び、やがてエバンストンの町に溢れる敬虔さ、フロンティア・スピリットの背後に流れるキリスト教精神、教会員の友愛に導かれて受洗します。

同時期、「日本の伝道は、日本人が担うべきである」という考えを持つ宣教師H・H・レビットと出会って、伝道者として生きることを勧められます。決意した澤山は、神学を学び、1876年(明治9)使徒パウロになって保羅と改名して帰国しました。帰国後、内海から政府の役人になることを勧められますが、使命に生きようとする澤山は、俸給わずか10分の1にすぎない伝道者の道を選んだのでした。

1877年(明治10)グリーンらから按手を受けて浪花公会牧師となった澤山は、伝道活動に力を注ぎつつ、翌1878年(明治11)梅花女学校を開校します。女学校が経営の危機に陥った1883年(明治16)からは自ら校長を務めて陣頭指揮に当たり、その尽力によって女学校の困難を克服しました。しかし、この間も結核は澤山の体を蝕み続け、家庭にあっては父母妹、妻子を相次いで亡くす大きな不幸に見舞われていたのです。

1887年(明治20)3月、34歳の若さで澤山はその生涯を閉じました。梅花女学校の開校からわずか9年後のことでした。同志社校長の新島襄は葬儀に際して告辞を述べ、澤山が為すべきことを為し、寛大で、克く人を容れ、人を捨てず、身を犠牲にする人物であったと、その人柄を偲んでいます。

澤山の志はその死後も継承され、幾たびかの存続の危機を乗り越えて、今日梅花学園は、茨木キャンパスに女子大学・同短期大学部、豊中学舎に高等学校・中学校・幼稚園を擁する総合女子学園として発展を遂げています。

2013年(平成25)1月、梅花学園は創立135周年を迎えます。